

---

# 闇の帝王（ダークエンペラー）

kyouya

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇の帝王  
ダークエンペラー

### 【Nコード】

N8974M

### 【作者名】

kyouya

### 【あらすじ】

水鏡 みかがみ 鈴音 すずね。それがこの少女の名前。

どこにでもいるごく普通の高校生。

ごく普通の日常を営む一般人・・・だった。

彼女は出会った。

感情を自らの力に変え、戦う術士、『心術士』（オーラ）。

その術士の中で、『闇の帝王』（ダークエンペラー）と呼ばれ、畏怖される男、霜月<sup>しもつき</sup> 共夜<sup>きよや</sup>。

2人が出会うとき、光と闇の究極の戦争が、始まる――！！

## 登場人物紹介（前書き）

これからいろんな人が出てくるので、挿絵を入れていろいろ説明していききたいと思います。

心強い助っ人のおかげで、挿絵ができます。

この絵を描いてくれたのは、わたやさん（僕の友人）です。

僕と同じく皆さんも満足して頂くことを願っています。

## 登場人物紹介

・霜月 しもつき きょうや  
共夜

> i 1 0 3 2 1 — 1 4 8 1 <

紺色の髪をした、赤く光る刀を持つ、17歳の少年。

その正体は、『心術士』（オーラ）達の中でも畏怖される、『闇の帝王』（ダークエンペラー）と呼ばれる『心術士』（オーラ）。

・水鏡 みかがみ すずね  
鈴音

> i 1 0 3 2 0 — 1 4 8 1 <

ひよんなことから共夜と出会った、17歳の少女。

共夜と出会ったことで、光と闇の戦争に巻き込まれていく。

テニス部所属。

・『心術士』（オーラ）

自分の感情を、世界に干渉させる力に変換し、常人を越える者達の総称。

古今東西で、魔術師、呪術師、陰陽師などと呼ばれる。

その力の根元は、『魂気』（こんき）と呼ばれるものが術士の心にシンクロして、現実が発せられている。

使う者達に、2種類の者がおり、『聖人』（レム）と『咎人』（とがびと）と呼ばれている。

・『聖人』（レム）

本来あるべき『心術士』（オーラ）の姿。

・『咎人』（とがびと）

七大罪の感情のうち、一つでも強くそれを抱き、『心術士』（オーラ）になったものになる、闇の姿。

厳密には、闇の道を行く者の中で、1種類のことを指す。

・『咎人』（とがびと）

別名シャドウ。

人間だった者が、『咎鬼』（とがおに）に心の闇を無理矢理引き出されてしまった姿。

理性は無くなっており、本能のままに動く。

・『咎鬼』（とがおに）

自ら進んで闇の道を歩んだもの。

ほとんどが『地獄ノ番犬』（ケロベロス）と敵対しているが、共夜などの例外もある。

## 登場人物紹介（後書き）

小説を書いていくうちに、いろんなイラストと説明加えていきます。



## 非日常の闇の戦い（前書き）

k y o u y aです。

「とある堕天使の聖戦」の方は、思ったよりもすごい反響（そうでもない？）でした！！

今回描くのは、オリジナル小説です！！

温かい目で見守ってくださいと幸いです！！

この作品も、「とある堕天使の聖戦」も、どちらもよろしく願います！！

## 非日常の闇の戦い

これはなに？

私は確か、普通に学校に通っていたはず。

私は確か、普通に部活をして、今家に帰る途中のはず。

…そこにいるのはなに？

体が黒く、人のような形をしている…

でも…絶対人間じゃない。化け物。少女はそう思った。

そして…その化け物の前に立つ、これまた真っ黒なコートに身を包む人。

（なに…これ…映画の撮影かなんか…？）

だが、化け物の足元を見れば、そんな考えは簡単に消える。

だが、見ないようにしていた。

見たくなかった。

2、3人の人の、血塗れの死体。

あまりにもリアルすぎた。

血の色も、そこに漂う鉄のにおいも。

においなんて、映画には必要ない。

（あれ…本物…？）

そこにいるごく普通の少女は、そこに立ち尽くす。

（なんにしても…あの人…早く逃げないと…！！）

しかし、すでに遅かった。

「ヴオオオオオオオオオ！」

化け物がうなる。

そして、男に襲いかかった。

(ツッ!!)

少女は、目を覆う。

これから起こる惨劇を、見たくなかった。

ザシュ!!ブシャア!!グチヨ!!

(ツッッ!)

耳もふさぐ。

あまりにリアルな、肉を引き裂く音。

五感すべてが現実を伝えてくる。

（ああ…あああ…）

きつとあの人は殺された。そうに違いない。

（どうしよう…私のところに来るかも…）

少女は恐る恐る目を開く。

そして見た。

その人は、生きていた。

死んだのは…化け物の方だった。

(え…!?)

少女は目を疑う。

そして…

「ハア…この世界にも咎人<sup>とがひと</sup>はいるみてえだな…」

は？なに？咎人<sup>とがひと</sup>？

意味の分からない言葉を話す黒コートの人。

声からして…その人は男のようだった。

「…全部斬り倒すか…ん？」

ビクッ！！

男がこちらを見た。

少女は思わず走った。

急いで家へと向かう。

今日のことを早く忘れてしまおう。

早く風呂に入って、宿題して、好きなテレビ番組見て、さっさと忘れてしまいたい。

これがすべての始まり。

これが、水鏡 鈴音と、霜月 共夜の出会いだった。

## 非日常の闇の戦い（後書き）

記念すべき1話！！

でも「とある堕天使の聖戦」より、人は来ないと思います。

ツイッターが使えぬから、宣伝は無理。

どなたかいろんな人に教えてください！！

あと感想よろしく願いします！！



## 日常（前書き）

1話だけで14ポイントも加算とか…

これは「とある墮天使の聖戦」のおかげかな？

なんにせよありがとうというしかない！！

## 日常

「…なんだったの…いつたい…」

少女が、学校で独り言を言う。

少女の名は、水鏡 鈴音。

ごくふつつの高校2年生。

その彼女は、昨日、非日常の現実を見た。

化け物。黒コートの男。死体。

(…馬鹿げてる…)

彼女は1人、考えていた。

——音ちゃん——

（あれは…夢だったのかな…）

——鈴音ちゃん——

（じゃなきゃ、あんな化け物…）

「鈴音ちゃんっ！！」

鈴音はビクツとした。

（えっ！？話しかけられてた！？ど、どうしよう…）

「鈴音ちゃんっ！！なにぼーっとしてんの！？」

声をかけてきた少女は、藤井<sup>ふじい</sup> 萌<sup>もえ</sup>。彼女の親友だった。

「ごめん、萌ちゃん。ちょっと考え事しててね…」

「考え事！？鈴音ちゃんか!？」

「なにその言い方？」

「いやー、鈴音ちゃんって特になんも考えないでなんかするタイプだから、そんなことしないかと…」

「なにそれ。ひどーい。」

「ごめんって、鈴音ちゃん。」

（やっぱり、夢だよあんなの。）

これが彼女の日常。

親友とおしゃべりして、授業はそこそこ受けて、部活でテニスして、好きな番組見て、一日を終える。

ただその繰り返し。  
それでも彼女は満足していた。

「ねえ、今度新しくできたケーキ屋寄らない？あそこなかなかおいしいって評判なの。どう？」

「ごめん、部活のせいで今日はいけないの。」

「えーっ、そんなー。」

「ホントごめん。」

「テニスなんかやめちゃえってー、鈴音ちゃん。」

「それは無理だよ、いくらなんでも。ホントごめん。でも、今度絶対いこー!」

「絶対だよー?」

「約束するよっ!」

「わかった。じゃあバイバイ。」

「バイバイ。」

いつも通りの生活。それが彼女を支えていた。

そして、いつもの日常が、いつものように過ぎていく。

――

じゅるるるるるるるるるる。

ドシャアー！

ある男が、通りで倒れた。

「…あー。」

じぎゅるるるるるるるる。

もう一度、変な音が聞こえた。

男のお腹から聞こえてくるようだった。

「…腹減った…」

もはや我慢できないレベルまでに達したらしい。動く気配が全くない。

「ちくしょー…ここで倒れるわけにはいかねえってのに…」

そして、男はある寮を見た。

そして…

「えーいチクショウ！！この空腹満たすためならば…！！」

そうして男は寮の中に入っていった。

――――

「はあ、しんどー。」

鈴音が学校から出てきた。

部活で疲れているらしい。少しふらふらと足がおぼつかない。

「早く寮帰って寝よー。」

ブーン！！ブーン！！



携帯がバイブした。

学校では原則、携帯は禁止だが、鈴音も、他の生徒も、そんな規則はどこ吹く風。

ただ、先生たちに見つかるためんどくさいので、バイブにしているのが常識だった。

（ああ、まだバイブのままだったけ？）

携帯をとりだし、開く。

藤井 萌。

携帯の画面に名前が出ていた。

『鈴音ちゃん。今日は部活どうだった？こっちはケーキ屋に行ってみただけど、すっごくおいしいの！！ショートケーキが、クリームもイチゴもすっごい甘くて最高！！今度、一緒に食べよ！約束だよー！！』

フツツと鈴音は笑う。

相変わらずの親友。

彼女はいつもこんな感じだ。

いつも通りの日常だと思い、鈴音は安堵する。

そして鈴音は彼女に返信メールを送る。

『いいなー。ケーキ私も食べたーい。今日部活がすっごくキツくてさ、甘い物が欲しいの。今度部活帰りにでも寄っていきっかなー。ちゃんと約束は守るよ。バイバイ。』

パクン、と音をたてて鈴音は携帯をたたみ、しまう。

もう辺りは暗くなってきた。

あちらこちらで蛍光灯が光り、家から明かりが漏れている。

寮についた鈴音。

（ええっと、今日のおかずなににしよう？食材はこの前買ったところだし…）

ガツガツムシャムシャパクパク。

（…？）

なんだろう？扉の奥から何か音がする。

（ツツツ！？）

これは彼女の日常ではない。

（え？なに？もしかして、あの化け物が…！？）

ガチャ。

恐る恐る扉の鍵をあける。

そして…奥には…

ガツガツパクパクムシャムシャ。

化け物はいなかった。

いたのは…

私の作った料理とかを片っ端から食べていく1人の男だけ。

「……………」

そしてその男はこちらを見た。

「…ん？」

男は口の中の食べ物を飲み込んだ。

「……………だれ？」

「それはこっちのセリフだぁアアアアア！」

ドゴォー！！

「ふげぁアアアアアア！」

鈴音の膝蹴りが、男の顔面に炸裂した。

## 日常（後書き）

この作品と「とある墮天使の聖戦」は、一週間に一回のペースで作っています。

とあるのほうを楽しみにしていたみなさま、すいません！！

霜月共夜

「いってええええええ！いきなりなにしがんだコノヤロー！！」

男は上の中ぐらいの顔だった。

年は・・・17歳ぐらい？

髪は、黒とも青とも言えない色だった。（紺色？）

服装は、今が冬であるのに、少し寒そうな格好であること以外は、普通だった。

黒いズボン。灰色のシャツ。

「なに人の家いきなり上がり込んでんの！！しかもご飯とかも食べ散らかしちゃって！！いったいなにが目的！？」

「なにつてそりゃ、腹減ったからこの寮に」

「うそつけえ！！」



バキィ！！

「グルコサミン！！」

意味不明な叫び声。

2発目の暴力。

格闘界にいる人ならばスカウトしたくなるような、見事なシャイニング・ウィザードだった。

「ぐおおおお！！こめかみがああああ！！」

「つくならもつとマシなうそつけ！！」

「テメエいくら自分が美人だからって、こんなことしてつと男に逃げられ」

「うっさいわああああ！！」

ガゴォ!!

「ほげあああああああ!!」

3 発目。

回し蹴り。男はもはやプスプス音を出して煙が出ている。

鈴音は確かに美人だった。

顔は上の上。

黒く、長い髪はつやがあって、なめらかだった。

その肌は、テニスをしているのに日焼けをあまりしていない。

輝くような白い肌。そしてなめらかな黒い髪。

その白と黒のコントラストは、見るものすべてを魅了する。

・・・が、そんなことは今はどうでもいい。

「あなたなに他に物色したの！！答えなさい！！」

「物色なんかしてません！！この部屋の奥のタンスの中が下着だらけだったとか俺は知ら」

死亡フラグ連発。

男がボロ雑巾のように成り果てたのは言うまでもない。

「まったくあの男通報してやるから！！」

そして鈴音は自分の部屋のドアを開ける。

「あーもうイライラする!!こんなんじゃ気が・・・」

鈴音の声が途切れた。

鈴音は絶句する。

・・・あるものを見たから。

あのときの、黒いコート。

(・・・え?)

それがハンガーにかけられていた。

(・・・なに・・・?)

「うつうつ・・・体中痛い・・・ん?どした?」

鈴音は絶句している。

「おい。どうしたー？」

「・・・なに・・・？あれ・・・」

「・・・あー。」

「あれ、俺のコート。」

鈴音は耳を疑う。

「・・・あん・・・たの・・・？」

「ああ、ちょっとばかり汚れてたから、洗濯してもらったから、  
今干してんだ。」

鈴音は、コートにあるものを見つけた。

血痕。

男はあの化け物を斬り殺して血まみれになっていた。

そして、思い出した。

（あれ・・・？）

認めたくないことだったが、認めざるを得ない。

（・・・こいつの・・・声・・・）

そう、確かこんな声だった。

すこし高い声。

聞き間違えるはずがない。

こんな声だった。

そして、脳裏にある考えがよぎる。



(・・・じゃあ・・・)

だから先ほどの声のことを認めたくなかった。

このことを認めたくなかったから。

(・・・この前のことって・・・)

――ヤメロー――

(・・・あれは・・・)

――カンガエルナー――

(・・・あれは・・・)

(夢じゃ・・・なかったんだ・・・)

「俺のじゃなきゃ誰のだ？お前も」

もってんのか？と言おうとした。

鈴音が倒れるまでは。

トサ・・・

「!？」

男は驚愕する。

「おい、どうした!?!おい!?!」

――

(・・・う・・・)

鈴音は起きた。

(・・・あれ・・・？なにが・・・)

そして、思い出した。

あのことが、夢ではなかったことを。

(・・・・・・)

未だに認めたくないことだった。

「・・・あの男は・・・？」

あの男がいらない。

もう、帰ったのだろうか。

そのとき・・・

ガチャッ。

「おー、目え覚めたか？」

男がやってきた。手に鍋を持って。

「!？」

「だいじょぶか？熱でもあったのか？」

「あ、あんなにして・・・」

「ああ、だって急に倒れたもん、そんなのほっとけるかよ。」

「・・・そう・・・」

「粥つくったけど、いるか？」

そういつて、男は鍋を鈴音に渡す。

「・・・ありがとう・・・」

「それ食ってから言ってくれ。」

「・・・うん・・・」

スプーンを持って、粥をひとすくいする。

そして、それを口に運んだ。

パクツ。

粥は熱かった。

だが・・・

(・・・!!)

すごくおいしかった。

「どうだ？」

「・・・おいしい・・・」

「そりゃどーも。」

鈴音も一人暮らしをしているから、多少料理は心得ているが、男はそれ以上にうまかった。

鈴音は粥をパクパクと食べて、平らげた。

「・・・そんだけ食欲ありゃあ、大丈夫だな。」

そして、男はふところからなにかを取り出す。

なにやらたばこのようなものだった。

そして、それを口にくわえ、ライターで火をつけた。



「ちょっと、なにタバコすってんの。私病人よ？」

そして、男はあ？と返事をした。

「タバコじゃねえよこれ。」

「線香だ。せ・ん・こ・う。」

は？

鈴音は啞然とした。

確かに、線香特有のいい香りが漂っている。

「・・・あなた・・・なにしてんの・・・？」

「え？いや、香りを楽しんでるだけだけど？」

「いや、なんで口にくわえてんの？」

「なにいつてんの？合理的じゃん？手に持つにもそんなのめんどくさいし、でもそうしないと持ち運べないし。でも、こうすりゃあ手は空くし、持ち運びできるし、香りがちゃんとかけるし。1石3鳥じゃん？」

「・・・端から見れば変人よ？」

「・・・お前も理解できない口か・・・はあ・・・」

そして男は立ち上がった。

「さて・・・と。そんじゃ、俺はこれで。」

そして、立ち去ろうとした。

「・・・ねえ・・・」

ギクッ！！

男は冷や汗をかいた。

（やべえよ、このままこの雰囲気に分れてとんずらしようと思ってたのに、バレた！？）

だが、男が思ったこととは全く違うことが、鈴音から出た。

「・・・ありがと・・・」

男は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。  
そして、優しい笑みを浮かべる。

「・・・どういたしまして。」

「名前・・・」

「・・・ん？」

「教えて・・・」

そして、男は少し黙った。

そして、口を開く。

「・・・霜月しもつき 共夜きよやだ・・・」

そして男はそこを立ち去った。

## 闇（前書き）

小説を両立させるのって難しい。

今すごく実感してる。

作品の中で愛着があるのは、こっち…かな？

オリジナルであるだけに。

闇

東京タワー最上部。

ある男がライターに火をつける。

そしてその火を口元に近づけて、ある物に火をつけた。

それからよい香りが出てくる。

男はその香りを楽しんでいた。

「相変わらずそんなもんしてんのね？」

そいつって後ろから声をかけてきたのは、女。

年は16歳ぐらいで、なかなかの美人。

茶髪を長く伸ばし、ところどころくせ毛がある。

どこかの制服を着ている。

シャツは白く、胸ポケットに大きくSと書かれていて、スカートは太い黒のラインと、極々細い白のラインが縦に交互に走っている。

だが、そんな制服をする学校は、日本にも、アメリカにも、ヨーロッパにもない。

この世界のどこにもない。

「前々から思ってたけど、おっさんくさいわよ？」

「うっさい。」

またかよ、と共夜はつぶやく。

その一言に？を頭に浮かべる女。

「いったいこんなところにどのような用事があるのでしょうか？ケロベロス2番隊隊長、音撫<sup>おとなで</sup>女神様<sup>めがみ</sup>？」



共夜はからかうように言う。

「あら、いちいちそんなこと言う必要があるのかしら、アンタみたいな脳みそしたやつに。」

やれやれ、という風に共夜は肩を落とす。

「わざわざこんな世界に、おまえみたいなのがやってきたってことは……」

ええ、と女神は答える。

「ヤツらもこっちに來てるわ。1人。」

「隊長格がか？」

「ほとんど全部が雑魚で構成された部隊だけだね？」

「…あーあ、めんどくさいことになったなー。」

「…ねえ…」

ん？と共夜は返事した。

「なんで、あの子の記憶消さなかったの？」

「…？なんの話？」

「あんたそれが目的であの寮にわざと忍び込んだんでしょ？」

「……………」

図星ね、と女神はつぶやく。

「そうしてわざわざ忍び込んで、ターゲットも都合よく倒れたって

のに、なんで？」

「……………」

共夜は黙っていた。

彼女の言うとおり、共夜は鈴音の化け物の記憶だけ消そうとして、あの寮に忍び込んだ。

そうしなければ、この世界は大パニックになるだろう。こっそりやっってしまう方が、こちらでも動きやすい。

…だがそうしなかった。

「……………当ててあげようか？」

「何にもやんねーぞ。」

「…『アイツ』に似てるからでしょ？」

「アイツ」、と言われて思い出すのは、長い黒髪。真っ白な、透き通るような肌。

そして…線香の香り…

「……………」

「…あんまり類似点はないんだけどね。…なんか…似てるのよね…  
『アイツ』に。」

「……………」

「だからでしょ…？記憶を消そうとしたとき、思い返してしまう…  
『アイツ』」

「少し黙れ。」

殺気こもった声で女神を威嚇する。

女神は黙った。

気圧されたのではなく、自分の負をわびて、そうした。

「…うめん。」

「…とろろで…」

「…ん？」

共夜は線香を鼻に近づけながら女神に尋ねる。

「さっきの話の、隊長は誰だ？」

女神は黙る。

バキッ、と音を立てて線香が折れた。

「あのクソやるうか？」

「……………」

やっぱりな、と共夜は独り言を言う。

「だからあの娘のことを話しかけてきたんだろ？話をはぐらかすために。」

「…それは…」

「そうなんだな？」

女神はうつむいていた。

一時の沈黙。

そして…

「…そうよ…」

次の瞬間、共夜は女神の前から消えた。

――

鈴音は昨日、眠れなかった。

夢だと思っていたことが、現実だった。

化け物。死体。鉄臭いにおい。

…そして、あの男。

「霜月…共夜…」

あの紺色髪の男の名を無意識に呼ぶ鈴音。

「え！？鈴音、誰のこと、それ！？」

ビクツとして右を見る鈴音。

そこにいたのは彼女の親友、藤井だった。

「ねえ、それ誰の名前？鈴音の彼氏？」

え！？とすつとんきょうな声を上げる鈴音。



「バカ、違う違う！！そんなんじゃないって。」

そんな反応をする鈴音を見て、藤井はホホウ、ソウカソウカと1人頷いている。

「はっはぁーん？鈴音、美人だから告白でもされたの？それとも自分からしたの？どっちー？」

鈴音は顔を真っ赤にした。

「ちっち違う違う！！そんなんじゃないんだから！！ホントに！！」

「またまたあ？照れちゃって。ね、どんな人？教えてくれない？」

だーかーらあ！！と返事する鈴音。

ほほう、とニヤニヤしながら鈴音をからかう藤井。

帰り道、鈴音は化け物のことについてなにも考えなかった。

――――――――――

「ったく、萌のやつ、なに言い出すんだか。」

頭から湯気を出しながら、鈴音は買い物に出かける。

ほとんどの食材は、あの共夜とかいう男にほとんど平らげられていた。

最低一週間分の食材はあつたはずだが、それを1人で平らげる時点で普通の人間ではない、と鈴音は思っていた。

(…なんだったんだろう…？あれ…)

いま、思い返すのは、あの化け物。

人のような姿をしていて、獣に成り下がったような、真っ黒な怪物。

そして、鈴音はあることを思い出した。

（そういえば、アイツがなんか言ってた…咎人とかって…）

言葉だけ聞いても、チンプンカンプンだった。

（もうやめやめ…！こんなこと考えたところで私にどういづでできる  
ことじゃ…）

「ギヤアアアアアアアアアア！」

ビクッ！！

鈴音は心臓が止まるかと思った。

誰かの悲鳴。向こうから聞こえた。

（え！？なに、今の声！？）

鈴音は恐る恐る向こう側に行ってみた。

ある裏路地。

そこを鈴音は覗き込む。そこに、真っ黒なコートを着た男がいた。

「…処理完了しました。」

共夜ではない。無機質な声。そこにはなんの感情もこもっていない。どうやら電話をしているようだ。

「…どうしますか？これから咎人を増やせばいいでしょうか？」

聞いたことのある言葉。

咎人。

増やす？処理ができた？

いったい何のことだ？と鈴音は考えていた。

そして見てしまった。

全身グチャグチャにされた、血まみれの死体を。そこにいる黒い化け物を。

肉片が建物に飛散して付着しており、目は見開かれている。

腸がぶちまけられ、食い荒らされている無惨な死体。グチャグチャと音を立ててその化け物は肉を食う。

「あ…ああ…」

声を出してしまった。

「!？」

そこにいた男が鈴音の存在に気づく。

「ちっ…見られてましたか…」

そして、そこにいた化け物の一匹に、男がある指示を出す。

「殺せ」

次の瞬間…

「ヴオオオオオオオオオオオ!!」

化け物が襲いかかってきた。

「ッッ!!」

鈴音は動けなかった。

ーウゴケ!!ウゴケ!!ー

頭から声が響く。

だが動けない。

「あ…ああ…」

ーウゴケ！ー！ー

足に感覚がなくなったようだ。

ーウゴカナケレバー

ー！ー！ー死ー！ー！ー

「あああああああああああ！！」

鈴音は悲鳴を上げながら走る。

後ろは見ない。見れば死ぬ。



走る。走る。走る。

後ろから、うなり声が聞こえる。

それでも見ずに鈴音は走った。

――――

「ちっ、こんなところで見られてしまうとは。」

そして男は携帯電話を取り出す。

（このことは早急に隊長に知らせなければ…！！）

ブルブル、と通信音が鳴り響く。

そして…

ドガァ！！

男は殴られた。

（なっ…！？）

そして、襲いかかってきた奴は倒れた男をう発ほど殴りつけ、気絶させた。

その男は、口元に線香をくわえていた。

「ちっ、予想通りだぜくそが…」

男はイラつきながら独り言を言う。

(アイツが行った方向は…)

そして、共夜は見つける。

鈴音の買い込んだ食材が、道筋通りに落ちてあるのを。

「ちっ…」

共夜は走る。

「めんどくせえなあ!!」

そして、足音とともに、共夜は闇に消える。

## 闇（後書き）

挿し絵書こうと思う。

キャラのイメージもちゃんとある。

でも最大の欠点が俺にはある。

絵心なんてなにもない。

チクシヨオオオオオオオオ!!

## 闇の帝王

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・!!」

鈴音は走っていた。

もうあたりはすっかり暗くなっている。

しかもここは人通りのない裏路地。

助けを呼べる状況ではなかった。

そんななか、鈴音はあるものを見つける。

「・・・!! 学校・・・!!」

とある学校を見つけた。

どこかに隠れたり、何かしら化け物を対処するにはよい環境。

鈴音はそう考えた。

（とり・・・あえず・・・中に・・・!!）

化け物が背後から迫り来る。

鈴音はテニスをしているため、瞬発力とそれを維持する持久力を兼ねそろえている。

だがそんな鈴音のペースに軽々と化け物はいいてくる。

体力も限界に近い。

校舎へのドアに向かって走り、そのドアについた。

運がいい。鍵が開いていた。

ドアが開く。

勢いよくドアの向こうに滑り込み、すぐさま鍵を閉める。

カチャ。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

鈴音は安心した。

(これで・・・もう・・・)

化け物が入ってこない。

そう安心しきっていた・・・



バリイイイン！！

「キャアアアアアアッ！！」

ドアについていたガラスが砕け散り、ドアが叩き壊された。

ガラスの破片と、ドアとの衝突で、あちこちに痣と切り傷が付いていた。

（あっ・・・っっ・・・！！）

痛い。体中が悲鳴をあげた。



だがそんなことを祈っても、誰も来てはくれない。

逃げるしかない。

生き残るために。

廊下を走る鈴音。

ここは小学校らしく、壁にかわいらしく「廊下を走らないでください」と書いてある。

それを見て鈴音は悪態を心の中でつく。

鈴音の足音がカンカンと学校の中で響く。

その足音を聞き、化け物は獲物を嘲笑うかのように口元を緩めた。

-----

鈴音は校舎を出た。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

（たす・・・かつ・・・た・・・？）

そして、学校の外に出ようと思った。

（逃げ・・・ない・・・と・・・っ！！）

バリイイイイン！！

「ヴオオオオオオオオオオオオ！！」

叫び声。上から聞こえる。

・・・化け物が、校舎の窓を割って、自分めがけて降りてくる。

「ッッッ!!」

とっさに横に飛び退く。

バゴォ!!

化け物が腕を振り下ろし、地面が深く深く抉れていた。

(はや・・・く、外・・・に・・・)

だが……

校門を見た鈴音は、絶望した。

「……え……？」

鈴音は頭の中が真っ白になった。

……校門の向こう側で、あるものを見た……

黒いコートの男の集団。

化け物が、7、8匹いる。

そして、そいつらは自分の方向を見た・・・

「標的発見。」

ある男が・・・化け物に・・・ある指令を出す。

「殺せ。」





ガアン、ガアン！！と音が響く。

どうやらこの体育館の扉を破ることはできないようだ。

（どう・・・すればいいの・・・？）

しかし、今の状況で、助かった、と安堵する彼女がいた。

だが・・・安堵するのはまだ早かった。

バキィ！！

なにかが割れた音。

そして・・・

「鬼ごっこは終わりだぜえ？子猫ちゃん？」

黒コートの男。そして・・・

化け物が入ってきた。

体育館にも窓はある。

それを化け物が叩き割って入ってくるのも、考えれば当たり前のことだった。

だが、鈴音はその音が聞こえたとき、もう諦めた。

（私・・・）

思いたくもないこと。しかしそれが現実だった。

(・・・死ぬの・・・?)

化け物が鈴音に向かって迫り来る。

よだれをだらだらと垂らして鈴音(獲物)を思う存分食らいつこうとした。

ある人物が彼女の脳裏をよぎる。

(・・・お父さん・・・)

鈴音の唯一の肉親。

母は生まれたときに亡くなって、叔父や叔母もいない。

大好きだった父は、よく出張に出かけ、鈴音と遊んでやれないことを悔やんでいた。

そして再開できると思っていた日・・・

彼は飛行機事故で行方不明となった。

鈴音は生きていると信じていたかった。

また、顔を出して会いに来てくれる。

また遊んでくれる。

・・・そんな思いを胸に秘めていた。

走馬燈。

それが彼女の頭に駆け巡る。

(・・・萌・・・)

最後に思い出すのは、彼女の親友。

(ごめんね・・・約束・・・破っちゃって・・・)

化け物の牙が、鈴音を切り裂こうとした。

斬！！

ある音が響く。

肉が切られる音。

だが・・・鈴音はなんの痛みも感じなかった。

（・・・え？）

鈴音は思わず閉じていた目を、ゆっくりと開ける。

「ったくよお・・・探したぜ？目印無くなっちまうもんだから町中駆け回っちまったじゃねえか。」

そこにいたのは・・・

高い声。黒いコート。そして・・・赤く光る刀。

ふとある香りが漂う。

・・・線香の香り。

「生きてつか？おい。」

・・・霜月 共夜。



「あ……え……？」

未だに状況が理解できていない鈴音。

あのと看見た赤い刀。

あのと看見た黒いコート。

あのと看見た……化け物の亡骸。

亡骸はすぐに、なにかに溶けたように消えていった。

「……怖かったか？」

共夜が優しく鈴音に尋ねる。

……鈴音は首を縦に振ることしかできなかった。

「……そうか……」

そして共夜は化け物と、黒コートの集団を見る。

「誰だテメエ！？その黒コート・・・まさか『ケロベロス』か！？」

・・・『ケロベロス』？

ケロベロスとは、あの地獄の番犬のことだろうか・・・？

・・・なにかの組織名？

だが、鈴音にはなにも思い当たらない。

「・・・だったら？」

共夜はそれがどうした？とでも言うように男に返事をする。

「・・・構わねえさ・・・」

男は化け物に命令する。

「殺せ!!」

「ヴオオオオオオオオオオオオ!!」

化け物の叫び声。

「・・・めんどくせ・・・」

そうつぶやき、共夜は線香をペッ、とどこかに吐き捨てて、刀を肩に乗せる。

「ッッ！！ダメ！！」

鈴音は叫んだ。

ダメだ。この数ではいくらなんでも・・・

共夜は刀を鞘に収めた。

そして・・・

時が止まったような気がした。

ドオ……!という音とともに、共夜の姿が消える。

グシャア！！と、共夜が立っていた足下がつぶれる。

ブオ！！

共夜が化け物の後ろに現れた。

・・・化け物は動きが止まった。

そして・・・

「『瞬』の神速・・・」

刀がいつの間にか鞘から抜き取られている。

共夜はその刀身を鞘に収める。

「・・・『闇鳴』（やみなり）・・・」

カチン。

音がした。そして・・・

ブシャアー！！

化け物が真っ二つになった。

「！？」

鈴音は驚愕する。

鈴音だけではない。黒コートの集団も同じだった。

「テ・・・テメエ・・・いま、いたい・・・？」

その問いに、共夜はめんどくさそうに答える。

「走った。斬った。はい、お終い。」



バカにしたような口調に、黒コートの1人は憤る。

「クソがあアアア！！ナメてんじゃねえぞおおお！！」

男が懐からあるものを出す。

黒く光り、ズシリと重たそうなそれは、今まで鈴音が見たことのないものだった。

・・・拳銃。

「共夜！！」

名前を叫ぶ鈴音。

だが、間に合わなかった。

バン！という乾いた音。

鉛の玉が、共夜めがけて発射された。

ヴ・・・ン・・・

なにかの音が聞こえた。

共夜から。

そして、鈴音は共夜を見る。

共夜が銃弾に当たったと思った瞬間・・・

共夜は煙のように霧散した・・・

そして・・・

「おいおい、物騒なもん出すなよ。」

なにもなかったかのように共夜は黒コートに歩み寄る。

「う・・・うあ・・・」

黒コートの男は目を見開いていた。

化け物を見たかのように。

そして・・・

「うあああああああああああ！！」

ガンガンガンバン！！と音が響く。

だが、共夜はまた霧のように霧散し、また元通りの姿に戻る。

「種明かししてほしいかなぁ？」

共夜がふざけた口調で男に尋ねる。

そして、共夜は続けていった。

「ただ極端に速く動いただけだ、ボケ。」

そして共夜は、男をガン！！と鞘で殴りつけた。

男はそのままピクピク、と震え、そのまま気絶した。

そして、共夜は残った黒コートたちを見る。

黒コートは、蛇ににらまれた蛙のようにビクッ!..として動かない。

「さあ、どうする?..まだやるか?..?」

黒コートたちは怯えきつた目で共夜を見て..

「うおおおおおおお!..!」

バン!!

1人が銃弾を共夜に向けて発射する。

今度は共夜は煙のように霧散しなかった。

軽く頭を傾けて、軽々と弾丸を避ける。

バサッ...

共夜の顔を覆っていたフードがとれる。

共夜の顔を見た黒コートの1人が、スッと血の気が無くなった。

「・・・紺・・・色の・・・髪・・・？」

そして、共夜の背中を見た。

鈴音は今まで共夜の背中を見たことはなかったが、今は見えた。

大きく「0」と書かれている。

「・・・0・・・番隊・・・隊・・・長・・・？」

そして、皆が目をカッ、と見開いた。

「・・・霜月・・・共夜・・・？」

共夜はニイ、と口元を緩める。

「なん・・・で・・・」

男は震えた声で・・・叫ぶ。

「なんで『闇の帝王』（ダークエンペラー）がここにいんだあああああああ！？」



共夜は鞘を構える。

そして優しく男の問いに回答した。

「仕事だからに決まってるだろう、ボケが。」

ガッ！！と黒コートを殴り倒した。

闇の世界を生きるもの（前書き）

共夜

「鈴音……？」

鈴音

「なに？」

共夜

「作者がのたれ死んでんぞ？」

鈴音

「ああ、それ上条の仕業。」

共夜

「……k y o u y a なにしたの？」

鈴音

「またとあるのほうで私たちの宣伝しようとして、『しつげえ……！』と一蹴されて上条に半殺しにされたみたい。」

共夜

「……」

## 闇の世界を生きるもの

・・・・・・・・・・・・・・・・

沈黙。

自分の前にいるものは、いったい何者なのか？

・・・「闇の帝王」（ダークエンペラー）？

・・・ケロベロス？

とにかく鈴音の知る世界ではない。

なにも分からず、混乱していた鈴音の前で、共夜は一蹴した黒コー  
トたちをなにやらゴソゴソと物色し始めた。

そこから取り出したのは、まず・・・黒コートたちの・・・携帯電話？

でも、あんな機種見たこともない。

そして、何かしらの紙。

共夜はそれを見て、うえ、と呻く。

「ここで咎人<sup>とがひと</sup>と・・・咎鬼<sup>とがおに</sup>を生産せよ・・・なあ・・・」

また出た。

咎人。そして、今度は咎鬼。

「え？え？なに、咎人って？それに・・・咎・・・鬼・・・？」

「・・・あとで、別の場所に移ってから説明するよ。」

そして、共夜はいきなり黒コートたちから押収した携帯電話から、ある電話番号を見て、ふーん、と1人納得する。

「・・・直接隊長（あのクソ野郎）につながるわけじゃねえか・・・まあ、こんな雑魚ならそれも当たり前か・・・」

そついつて、いきなり発信ボタンを押した。

「えっ！？ちよっ！？」

こんなところで電話すれば、場所がばれてしまうんじゃない？……！？  
だが、そんなことしてどうなるの？とでも言いたげに鼻歌交じりで電話した。

-----

「おい、報告はまだか！？」

怒鳴る男は、黒コートに身を包んでいた。

「はっ、それが……どうやら小娘1匹にてこづっているようだし

て・・・」

「早くするよう連絡しろ！！あと5分だ！！それまでにしなければ・・・！！」

男がいたのは、ある廃ビルの2階。

そこで隊員に指示を出していたわけだが・・・

隊員からの連絡が途絶えていた。

（早く・・・！！）

男は焦っていた。

（早く・・・あと5分以内に処理しなければ・・・！！）

「しなきゃどうなるって?」

ビクン!!として、男は後ろを見る。

そこには・・・ある男が立っていた。

長い白髪・・・目は青色・・・

そしてなにより・・・そこにただ感じる、プレッシャー威圧感・・・

「隊・・・長・・・!!」

「どうしたの？もうすぐ時間だよ？どうしてたかが小娘1匹処理できないかなあ？」

「・・・あの・・・」

「どうして処理できないかなあ？」

その瞬間、空気が、重力がズン！！と重くなったように感じる。

なぜか、立てなくなった。

どうやら、そこにいるもう1人の男もそうらしい。

「どうして？咎人を使えば簡単に、人間なんて処理できるでしょう



？なのになんとしてそれができないのかなあ？」

「お．．．おそらく．．．」

「おそらく？」

「ケロ．．．ベロ．．．ス．．．が．．．かか．．．わって．．．いると  
の．．．報．．．告．．．が．．．！！！」

そういつと、隊長と呼ばれた男は、口元をゆがめる

その瞬間、男を押しつぶそうとしていた空気がピタリ、とやんだ。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

「やっぱり来たねえ．．？」

隊長は笑っている。

どこでも見たことがない、邪悪な笑みを浮かべている。

それを見て、そこにいた2人はゾツとした。

ブーン！！ブーン！！

携帯が鳴った。

「隊長！！」

「・・・なに？」

「報告が！！小娘を処理したようです！！」

そして、男は通信ボタンをピツ、と押した。

『はっ ああーい？こーんばーんわあー？クソ野郎どものみなさん  
？』

・・・隊員からではなかった。

この声は・・・誰だ・・・？

「お・・・まえは・・・いつたい・・・？」

そんな声を出すと、向こうは笑い出した。

『ハハッ、そうビビんなんてー？処理ならしたぜー？』

「・・・処理？」

そうか、別の隊のものだったのか、と男は安心した。

『テメエらクソ部隊のやつらを今ボッコボコにしたところでえーつす。料金もらえますかね？マゾに目覚めさせるなら追加500000円ね。』

男は真っ青になった。

・・・うちの・・・部隊が・・・全滅・・・？

そんな男の沈黙もかまわず、男は鼻歌交じりで続ける。

『クソ隊長に言っといてくれる？』

そして、鼻歌をやめて、殺気混じりの声でこう言った。

『テメエにお得な地獄行きの旅行をプレゼントしてやる。いまのうちに懺悔しとけカス野郎。』

ブツッ。

画面に、「通信終了」と出た。

「・・・どう？処理できてた？」

「・・・あ・・・ああ・・・」

「・・・できてなかったんだね？」

そして、ゆらりと隊長の体が動く。

「・・・もう、時間過ぎちゃった。」

2人の顔に、絶望が浮かぶ。

「ま、待ってください！！ま、まだ・・・」

ブチィ！！ブシャア！！

・・・なにかがちぎれる音がした。

・・・赤い液体が流れ出てくる。

そして、その音とともに、男の体が倒れる。

・・・首なしの状態で。

「ひっ、ヒYYYYYYYYYYYYYYYY！！」

そして、もう1人も逃げようとした。

だが・・・末路は先ほどの男と同じだった。

口元に付いた血をペロリとなめて、隊長は笑う。

「あはあ。」

-----  
-----

ピッ、と通信終了のボタンを押す共夜。

「さて・・・と・・・」

共夜は鈴音の顔を見た。

「ねえ・・・」

「ん？」

「・・・大丈夫なの・・・？あんなことして・・・」

鈴音は顔が真っ青だった



明らかに先ほどの電話は挑発だった。

相手が黙っているはずがない。

その問いに、共夜は笑って答えた。

「大丈夫だ。お前の身の安全ならなんとかできるさ。」

そういつて、共夜は、自分の携帯電話を取りだした。

この機種も、見たことがない。

そして、誰かと通信する。

「あ、もしもし。総隊長？ああ、はいはい。ちよい保護してほしいやつがいんだ。・・・うんうん。そう。あのクソツタレどもも動いてる。駆除した方がいいな。・・・はいはい、わかったわかった、以後気をつけるって。本部への門、開いてもいい？・・・オッケー、わかった。」

携帯をパクン、と閉じて、ポケットにしまった。

共夜は右手を出して、空間を指でなぞった。

すると・・・

バクン！！

音を立てて、指でなぞった空間が裂けた。

もはや鈴音は驚愕の声すら出せない。

そして・・・

「ほれ、早く行くぞ？」

私の手をつかんで、空間の裂け目に入ろうとした。

「ふえ！？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまう鈴音。

そしてそのまま共夜とともに入っていつてしまった。

『心術士』（オーラ）

空間の裂け目に入った鈴音は、驚愕した。

そこにある空間は、黒、黒、黒、ただひたすらに黒。

そこには温もりなど無い、冷たい空間。

少しでも気を抜けば、その闇に溶けてしまいそうだった。

鈴音は怖かった。

（・・・怖い・・・）

黒から連想するのは、先ほど自分を襲ってきた化け物たち。

恐怖が、鈴音の理性を徐々に奪う。

（・・・温かい・・・）

ただただ暗いその空間の中、共夜の手のひらだけが、その温もりを伝えてきた。

普段の鈴音なら、絶対とらないであろう行動に、鈴音は移った。

共夜の握っている手から、腕へと移る。

ガシッ！！と強くつかみ、共夜はほえ！？と素っ頓狂な声を上げて叫ぶ。

「ちよっ、おま、なにして・・・」

だが共夜は怒鳴る直前になって、鈴音の心境を察した。

「・・・・・・・・・・」

鈴音を眺める。

・・・眺めたくなってくる・・・

・・・ひどく懐かしい思い出・・・大切な思い出と、鈴音がダブって見えた。

「ッッ!」

一瞬ノイズが走った気がした。

共夜の腕に捕まっているのは、鈴音ではない。

長い黒髪。透き通る白い肌。

・・・儀式装束を着た、共夜の大切な人。

「・・・し・・・ずく・・・？」

だが、その幻影はすぐに消え去る。

そこにいるのは、鈴音。

「・・・？しずくって・・・？」

その声に、ビクッとする共夜。

・・・共夜は動かしていた足を、いつの間にか止めていた。

共夜が、なにか悲しげな顔をした。

だがその表情を無理矢理押し殺して、引きつった笑みを浮かべる。

「・・・なんでもない・・・先行くぞ。」

そしてまた足を動かした。

-----  
-----

しばらく走っていると、一筋の光が見えてきた。

温かい光。

「ほっ、と。」

バン！！と音を立て、跳躍する共夜。

だが・・・跳躍する距離が半端なかった。



だいたい50メートルは跳んだ。

「わわわわわ!!」

鈴音も共夜に引っ張られて、空を飛んでいた。

そして、鈴音たちは光の中に入った。

バグン!!

また空間が割れる。

そして割れた空間に入ってしまった。

まばゆいばかりの光。

そして・・・

バガン！！

派手な音を立てて壁と衝突する共夜。

「おぐお！？」

「きゃあああああ!?!」

鈴音も共夜がぶつかつた壁に衝突しかけたが・・・

バゴン!!

「あんぎゃあああああ!?!」

壁と鈴音が衝突する際、共夜が間に挟まっていて、クッションの役割をしたため、鈴音は怪我を負うことなく無事に着地した。

・・・共夜はもろに激突した上、衝撃を鈴音の代わりにすべて受けたので、無様に地面に転がったが。

「おおおおお!!鼻があアアア!?!」

激痛で悲鳴をあげる共夜。

だが、共夜の悲鳴よりもまず、鈴音は、あるものが目に入った。

「あちゃあー、もろに鼻ぶつけたわね、共夜。」

そこにいたのは、音撫 女神。

「まず忠告つてもんをしろ！！くそつたれが！！メチャクチャいてえんだぞこれ！！？」

「ゲート開いただけでも感謝しなさい」

「デメエ！！ふざけんなよこのババア！！」

「んだとお！？もっかい言ってみろこのクソガキ！！」

ギャーギャーと2人が口論している間、鈴音はポカンとしている。

「なんなのよ・・・ホントに・・・」

共夜と女神はハッとして鈴音を見る。

自分は普通の学園生活を送っていたはずだった。

普通の生活。普通の友人。普通の世界。

なのに目の前に広がるのは、わけのわからない線香中毒者と、女子高校生。

もはや鈴音は限界だった。

「なんなのここ！！なんで化け物に襲われるの！？あんなたち何者なの！？あの黒コートはなに！？わけわかんないのよ！！もういや！！」

鈴音は怒鳴った。

鈴音の気持ち。

本当にわけがわからない。こんなことに巻き込まれる覚えもない。

何で自分がこんな目に遭うのか分からない。

すべてが理解できない。

・・・もういやだ・・・

もうこんなのいやだ・・・

夢なら覚めてほしい・・・

だが、夢ではない。

鈴音は涙を流す。

・・・どうしてこうなったの・・・

「もう・・・いや・・・」

絞り出すような、精一杯の声。

「・・・助けてよ・・・誰か・・・」

彼女のSOS。

誰でもいい。答えてほしい。

ポン。

共夜は鈴音の頭に手を置いた。

「・・・安心しろ・・・」

そして共夜は鈴音に言い聞かせる。

「お前を誰も傷つけやしねえ。俺がいる・・・」

そして、鈴音の目を共夜は見つめる。

「・・・俺を・・・信じてくんねえか？」

・・・共夜の目を見る鈴音。

深く青い瞳孔の目。

そこには一点の曇りもない。

「誰が味方かなんかなんてわからないかもしれない・・・でも、俺



は信じてくれねえか・・・」

「・・・・・・・・・・」

鈴音は黙った。そして・・・

「・・・・・・・・（コク）」

頷く鈴音。

その様子を見て、共夜は自然と笑みをこぼす。

「・・・女神、じゃあ、先行くぞ。」

「・・・わかった・・・」

そして、共夜たちは女神をあとにした。

「・・・ここ、どのなの・・・？」

鈴音は尋ねてくる。

そして、共夜は答える。

「・・・『地獄ノ番犬』（ケロベロス）本部だ・・・」

また出てきた、ケロベロス。

「・・・『地獄ノ番犬』（ケロベロス）って、なに？」

少しの間、共夜は沈黙して、答える。

「・・・『心術士』（オーラ）を管理する組織・・・世界のパワーバランスを整える、管理者だ。」

「・・・『心術士』（オーラ）？」

また知らない単語だ。

それを察してか、共夜が説明する。

「『心術士』（オーラ）ってのは・・・」

「簡単に言うと、自分の感情を武器にして戦う術士のことだ。」

『地獄ノ番犬』（ケロベロス）（前書き）

k y o u y a

「共夜アアア!!」

共夜

「でつかい声出すな!!何だ、急に!!」

k y o u y a

「もしかしたら挿絵ができるかもしれない!!」

共夜

「はあ?」

k y o u y a

「絵心なしの俺に、ある友人が俺の小説のキャラ描きたいって言ってくれました!!もしかしたら許可もらえば出すことできるかも!!」

共夜

「・・・でも人が見に来てくれなきゃ意味なくね?」

k y o u y a

「・・・・・・・・大丈夫・・・・・・・・とりあえず俺が満足するから。」

共夜

「・・・・・・・・」

k y o u y a

「あと、この話はフィクションです。実際の話ではなく、仮想の話です。あんま鵜呑みにしないでね。科学的知識もあやふやだから自分でちゃんと調べてください。」

## 『地獄ノ番犬』（ケロベロス）

共夜たちは、共夜が衝突した、ある建物の中に入っていった。

共夜は鈴音に、白く長い廊下を歩きながら説明をしていく。

・・・共夜に説明されたことを、もう一度確認してみることにした。

まず、『心術士』（オーラ）という、自分の感情を武器にして戦うことのできる者がいるということだ。

そして、その『心術士』（オーラ）を管理するべく生まれたのが、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）ということらしい・・・

・・・にわかに信じられないことだが、本当のことのようだ。

鈴音は見た。

共夜の超人的な身体能力を。

50メートルも跳躍できる人間など見たこともないし、銃弾が当たったかと思えば、霧散する人間も見たことがない。

・・・鈴音は、改めて、自分が非日常の世界に来てしまったことを実感する。

「説明、続けるぞ。」

共夜が鈴音に言う。

「『心術士』（オーラ）っていうのは・・・もつともポピュラーなもので言つと・・・魔術師とか、呪術師とか・・・この世界の日本で言う陰陽道とかがそうだ。自分の感情を、現実干渉する1つの力に変えて、戦うことのできる者・・・本来なら、誰にでもある力なんだ。」

え？と鈴音は声を上げる。

誰にでも・・・ある力・・・？



「・・・例えば、火事場の馬鹿力とかいう言葉がある。人間が危険な状態に陥ったときに、普段よりも強い力を出す・・・このとき、科学的にはホルモンが働いて、血液を普段よりも多く運んで、酸素の供給率が上がり・・・とかなんとか言われてるけど、実際はそうじゃない。」

「・・・ホルモンが関係してるんじゃないの？」

「いや、多少関係しているが、でかいのは心理的な力・・・精神が要因する。」

そして、共夜はさらに続けて言う。

「精神つてのは、実は身体的なエネルギーの1つを担う役割を持つてる。普段出すその力は本当の力の1パーセント未満の力だ。そのエネルギーは、ある心理的状況に極端に陥ると、発動する。よくあるだろ？超能力とかがそのいい例だ。・・・ま、その場合でも実際の5パーセントなんだがな？」

「・・・そんなものが・・・あるの・・・？」

「・・・発現するための力はある・・・」

「・・・それって・・・？」

「普通の人間じゃ感知できない力。世界じゃ霊気だの、妖気と言われているが、俺らは『魂気』（こんき）と呼んでる。力が発現するかしないかは、この魂気の要因が大きい。この力は個人によって大きさも感触もなにもかも違う。ある程度、才能ってのがいるな。この魂気の力で、どれだけの感情とシンクロして、どれだけ現世を歪められるか・・・そこで『心術士』（オーラ）になるかどうか分かる。」

「・・・『魂気』（こんき）・・・『心術士』（オーラ）・・・」

「とりあえず、『心術士』（オーラ）という者が存在することは、信じてくれるか？」

・・・コクリ、と頷く鈴音。

「・・・で、その『心術士』（オーラ）には、大きく分けて2種類の者がいる。」

「・・・2種類？」

そう、と共夜は相づちを打つ。

「1つは、『聖人』（レム）。光の心を持つ、本来あるべき『心術士』（オーラ）の姿。」

「『聖人』（レム）・・・」

「そして・・・もう1つが・・・」

続けて共夜は言おうとした。

じぎゅるるるるるるるるるる。

・・・共夜の腹から変な音が聞こえる。

そして・・・

ドシャアアア!!

いきなり共夜が倒れた。

「え!？」

鈴音は驚愕した。

いきなり倒れるとは、さすがに誰も思わない。

「・・・あー・・・」

共夜が蚊の鳴くような声で話す。

「ちょ、どうしたの！？共夜！？」

鈴音は共夜を呼ぶが、声は届いていない。

よく見ると共夜は白目をむいている。

もしかしてなにか反動でも起こったのか、それとも怪我をしていたのか・・・

鈴音は恐怖した。

（誰か・・・）

そして、鈴音はあちこちを見ていた。

すると、長い廊下の向こうから、2人の人がやってくるのを見つめる。

そして、その2人は共夜たちを見ると、こちらに走ってやってきた。

1人は女性。

長い髪は金に近い茶髪で、すごく白い肌をしている。

着ている服は、白を強調する色合いの服。

スカートをされていて、色は紺色の生地だった。

・・・なにより目を引くのは、その胸。

（でかつ！？）

鈴音のものより明らかに大きい。

・・・そんなことはどうでもいいとして・・・

そして、もう1人は男。

・・・こちらでも女性と同じような色の、短い髪。

・・・顔は小さく、10人中10人の女性がイケメンと呼ばれるくらい、クールな表情。

白のワイシャツの下に、黒いズボン。

「どうしたの？」

女性のほうが話しかけてきた。

そして、共夜を見るなり・・・

「・・・共夜・・・？」

女の方は、共夜のことを知っているようだった。

「あの・・・急に共夜が倒れちゃって・・・」



そういつた鈴音に対して、男はとんでもないことを発言する。

「いつものことだ、ほっとけ。すぐ起きるだろ。」

・・・は？

なんだろう、この男の人。

表情だけじゃなくて、中身も冷たい。

「ちょっと、そんなこと言うもんじゃないわよ！？魅守！！この子共夜のことはまだなにも知らないんだから！！」

女の人が、魅守・・・という名前なのだろう・・・その男の人を怒鳴る。

だが・・・

「うつせえ、いいだろ別に。こんなんでも死ぬかよこいつが。それにこいつがどう思おうが俺には関係ない。」

すんごい淡泊な反応。

・・・あまりこの人に好感は持てなさそう・・・鈴音は密かにそう思った。

「何でそんなこと言うんですか！？急に倒れた人をなんでそんな風に冷たく突き放すんですか！？おかしいですよそんなの！！」

・・・ザザザ・・・

「「ツツ！？」」

鈴音が・・・鈴音じゃない「誰か」に変わった・・・ダブったように見えた・・・

そして・・・鈴音の代わりにいたのは・・・

「・・・<sup>つへ</sup>響・・・？」

そして、次の瞬間、鈴音はもとの鈴音に戻った。

鈴音はキョトンとする。

「・・・震・・・？」

そして、2人は驚愕していた・・・

(・・・なんだ？今は・・・)

魅守と、そこにいた女の人も、同じことを考える。

が・・・

「そこまで共夜を突き放すこともないでしょ！？なんとかしてくださいよ！！」

・・・鈴音が言い寄ってくる。

言い寄ってくる鈴音が、魅守と女の人には、「ある人物」にダブって見える。

「・・・ちっ・・・」

舌打ちをする魅守。そして・・・

「・・・わかった・・・起こして食堂に連れていきゃいいんだろ・・・？」

・・・え？

「・・・食堂？」

鈴音はポカンとして魅守に尋ねる。

そ、と言って女の人は答える。

「倒れる前に、変な音聞こえなかった？」

そう言われて鈴音は思い出す。

「……急にぎぎゅるる、って……」

そして、その女の人の言葉は、鈴音を啞然とさせる。



そんな鈴音に構うこともなく、続けて説明する女の人。

「だから、なにか腹一杯食べさせてあげればすぐ元気になるんだけど・・・」

けど？

その語尾に少し不安を募らせる鈴音。

「そいつ、なにか食べるまで起き上がれないのよ。極度の空腹に陥ったら、最後の力を振り絞って動くけどね。」

・・・

鈴音は共夜をキッ！！とにらむ。

そんなことで私は心配してしまったのか？なんだか急に恥ずかしくなると同時に共夜に対して怒りがわいてきた。



だが・・・

(・・・あれ？)

・・・ふと、鈴音は冷静になって考えてみた。

もしかして・・・対処するには、放っておくか、連れて行くかのどちらかしかないの・・・？

そんなことを考えた鈴音だったが・・・

「でも、裏技があるのよね」

・・・裏技？

「そんなのあるんですか？」

いったいなにをするのだろうか？

そんなことを考えていると、その女の人は共夜のところに近づき、  
そして・・・

「えいつ  
」

ぎゅむ。

いきなり共夜に自分の胸を押しつけた。

なあああああああっ!?

鈴音は絶叫した。

そして、その様子を見て、魅守はやれやれ、というような顔をしている。

(え!?!なに、この人いつたいなにして・・・!?)

・・・まさか、こんなことして、共夜は興奮して起き上がるのか・・・?  
?

鈴音は考えたくなかった。

だがもしそうだとしたら・・・

(・・・最低・・・)

共夜の好感度が一気にダウンする。

だが、その考えは、「いい意味」(?)で裏切られることとなる。

死んだように倒れていた共夜が突然動き出した。

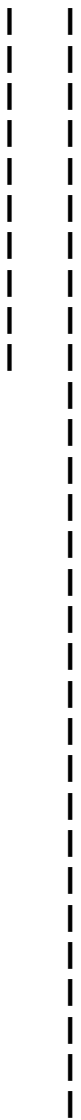
ゾワゾワゾワゾワァッ！！

いきなり共夜が震えだした。

そして……………



そんなことを言う女の人に対して、魅守はこの変態野郎、とボソリとつぶやいた。



この『地獄ノ番犬』（ケロベロス）本部には、食堂が存在する。

ここの食堂は今日もいろんな人がいる。

ガヤガヤとお互いに話し合う人たち。

そこにいる人は、ゆうに1000を超えている。

そんななか……

……ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

なにか音がする。

それは、ある扉から聞こえてきた。





扉は共夜によって砕け散り、扉付近のものは、共夜に容赦なくはね飛ばされた。

なんだなんだ？ いったいどうした？

そんなことを考える集団。

だがそんなことを考える暇もなく、共夜は食堂内を激走する。

バカーン！！ドカーン！！ダパーン！！と破壊音がこだまする。

それに巻き込まれた者は、あとで救急治療室のお世話になった。

-----

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

鈴音たちは共夜を追いかけていた。

よほど嫌だったのだろうか。全速力で走っていることが分かるくらい、床や壁に足跡が深くめり込んでいる。

「・・・なんなのよ・・・アイツ・・・!!」

「なんで私をいやがるかなあ？共夜。」

「・・・過去にアイツを寝込みで襲いかかったやつがなにいつてんだ・・・」

「・・・この女の人あまり好感は持てそうにない・・・鈴音は密かに思う。」

そして、曲がり角に差し掛かると、1つのぶち破られた扉を見た。

そしてその方向に向かっていると・・・

ドパアアアアン!!ガシャアアアン!!

凄まじい破壊音が響いてくる。

「「「・・・・・・・・・・」」」

3人は沈黙する。

「・・・・・・・・おまえのせいだからな・・・」

魅守は女の人にそう言った。

「ど、どつすねばいいんでしょう・・・？」

「・・・・・・・・ちっ・・・・・・・・」

舌打ちして食堂の中に入る魅守。

「え!？」

鈴音は驚嘆した。

あの轟音の中、入っていくって・・・大丈夫なのか？

「だ、大丈夫なんですか？あの人。」

そして、破壊音が30秒ほど響いたあと・・・

「おい共夜、お前の好きなマグロ丼ができたぞ！」

シュビバツ！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

嘘のように静まりかえった食堂。

・  
・  
・  
・  
密かに共夜に失望した鈴音だった。

『地獄ノ番犬』（ケロベロス）（後書き）

前に投稿したのと設定を変えました。

夜（前書き）

やったー！！挿絵できた！！

やっぱり持つべきは親友だね！！

## 夜

ガツガツムシャムシャバクバクゴクゴクバクバク。

バクバクゴクゴクムシャムシャガツガツ。

・・・2つの食べ物を食いあさる音が響く。

その音が出る方向を見て、鈴音は無表情になってしまっていた。

・・・食う音の原因は、共夜と魅守。

共夜はマグロ丼がもうスープと間違われてもいいくらいに醤油をドバドバかけて食べている。  
おかわり20杯目に突入。

魅守は天ぷら丼を、もはやかき氷と間違われそうなくらい塩をかけて食べている。  
おかわり19杯目に突入。



お互いににらみ合って食いあさる2人。

「むーっ、むままももごもまががまみーま！！（なんだテメエそんなに塩かけて食いやがって！！塩分の過剰摂取で死ぬぞバカ！！）」

「むももまがまみままががごもままがが！！（テメエこそなんだその醤油の海は！！塩分の過剰摂取で死ぬぞバカ！！）」

お互いどうやって言葉理解してるんだろう。

とりあえず鈴音が言えるのは、2人とも死ぬからやめるバカ、くらいだということだ。

・・・お互いに嫌いあう2人。

はあ、とため息をつく鈴音。

とりあえずあんなもの見てたら食欲が失せるので、離れて食べる鈴音。

先ほどの共夜暴走で、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）内の通路は178カ所が損傷。

食堂内は、テーブルが700個中320個が破損。

共夜にひかれて重軽傷を負った人、184名。

なお、今回の暴走を引き起こしたとして、先ほどの女の人がすべて責任をとることになった。

「・・・はあ・・・」

ため息をつく鈴音。

ここにいるのは変人ばかりなのだろうか。

1人気落ちする鈴音。

そんなときに、トントン、と背中を叩かれた鈴音。

そして振り返ると・・・

「はあい」

先ほどの女の人がそこにいた。

「あ・・・」

「さっきはごめんね。あんなに暴走するとは思わなかったから。」

「い、いえいえ、いいんです、こっちはなにも被害受けてませんし・・・えーと・・・」

そつえば、名前をまだ聞いてなかった。

「ああ、まだ自己紹介もしてなかったわね？私、  
吹雪<sup>ふぶき</sup> 刹那<sup>せつな</sup>っ  
てい  
うの。よろしく。」

名前を覚えてくれた刹那。

「で、そっちは、なんていうの・・・？」

「あ、水鏡です。水鏡 鈴音。」

そうして、自分の名前を教えた鈴音。

すると・・・

「・・・・・・・・」

急に黙ってしまった刹那。

「・・・・？どうしたんですか？」

え？と返事する刹那。

「あ、いやいや、なんでもないので・・・ちょっと、考え事。」

「???」

なんだかよく分からない鈴音。

このまま黙っているのもなんだから、鈴音はなにか話しかけようとした。

「刹那君、刹那君、ちよつといい!？」

後ろにいる誰かに話しかけられた刹那。

その人は男の人だった。

少し長い茶色い髪で、声は高め。

黒い服を着ていて、手になにか石のようなものを大事そうに持って

いた。

「あら、黒地<sup>くろち</sup>、どうしたの？」

刹那が声をかけると、その黒木と呼ばれた男の人はなにか心配そうな声で話しかけてきた。

「さっき、僕の大事な大事な石をテーブルの上に置いたんだけどさ、トイレ行ってる途中で共夜が暴走するもんだからそこら中食堂がボロボロになって、石がどこにも見当たらないんだ！！知らないかい！？僕の石は無事かい！？」

・・・またなにか変な人がやってきた。

すると刹那は・・・

「ああ、あれのこと？」

と言って、ある方向を指し示す刹那。

そこには・・・

粉々になっていた、水晶があつた。

「はぎゃ ああああああ！　僕の石がアアアアアアアアア  
ア！」

叫びながら石に寄っていく黒木。

そして、そばに着いた途端、膝をついてうなだれていた。

「……なんなんですか？あの人……」

「ああ、あいつね？黒地くろち石人。いしひと昔つから土のことが・・・中でも



石のことが大好きな、重度の大地フェチ。」

やっぱり変人か。と鈴音は独り言を言う。

「私も初めてあったときびっくりしたわあ、いきなり『石って見ると舐めたくなるよね？土っていい香りがするよね？』とか言ってくるんだもの。」

・・・まともな人はどこにもいないんだろうか、と思う鈴音だった。

そうしてまた落ち込む鈴音・・・

もう誰も話しかけないで・・・そう思っていた鈴音だった・・・

「ちょっと失礼してもいいかい？」

そうして話しかけてきたのは、短く黒い髪をした、黒いローブに身を包む男。

もううんざりしていた。

いったい今度はどこの変人？そう思っていると・・・

「えっと、あなたが今回保護を受けることになった、水鏡 鈴音ちゃん、だよな？」

・・・あれ、意外とまともな人？

「共夜が超特急で知らせてきてね？こつちもいろいろ事情があつて忙しかったから、声かけるのが遅れてしまったんだ。もうしわけない。・・・って、聞いてる？」

・・・鈴音は啞然としていた。

声をかけられて、ハッ！！とした鈴音。

「あ、ええと・・・その・・・はい、大丈夫です・・・」

とりあえずなにか返事をしておこうとした鈴音。

「・・・？どうかしたの？」

「あ、いえ、あの・・・さっきから・・・変わった人ばかりがいる

もんだから・・・今度は・・・いたいどんな・・・ええと・・・  
その・・・変わった人なのかなあって・・・あの・・・」

そういうと、男はハハハ、と笑った。

「ああ、そうだったの。うちはとにかく変なやつばかりだから、  
染みにくいと思うけど、すまないけど、我慢してくれるかい？」

「あ、あの・・・ホントに・・・すいません・・・」

「いいよ、別に。あ、自己紹介まだだったね？僕は夜神やがみ峰仙ほうせん。  
よろしく、鈴音ちゃん。」

・・・前言撤回。まともな人もいるもんだ。

そんなことを考えていた鈴音の耳に、刹那の音が聞こえた。

「・・・夜神総隊長、なんでこちらに・・・？」

刹那が呆然として言った。

・・・総隊長・・・？

え？総隊長？それって、一番偉い人ってこと・・・？

その瞬間、顔を真っ赤にして、立ち上がって頭を下げた鈴音。

「ごごごごごめんなさいっ!! そんなお方だとは思ってなくて、  
つい・・・っっ!! 本当にすいません!!」

「いいていいて、そういうのは慣れてる。頭あげて。」

そうして、ゆっくりと頭を上げる鈴音。

まだ顔が真っ赤になっている。

とんだ大失態を犯してしまった。

鈴音はそう思った。

そうしていると、総隊長のほうからこちらに話しかけてきた。

「鈴音ちゃん・・・あの化け物たちを見たかい？」

ピク、と反応する鈴音。

真っ黒な姿。

人のような姿をしていて、人間を喰っていた、あの化け物。

「・・・はい・・・」

小さく返事をした鈴音。

「・・・そうか・・・怖かったかい？」

「・・・・・・」

鈴音は無言のままだったが、そのまま首を縦に振る。

「・・・共夜から、どのくらい説明してもらった？」

「・・・『心術士』（オーラ）、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）、  
『聖人』（レム）・・・そんなところです・・・」

「・・・じゃあ、まだ咎人<sup>とがひと</sup>については、まだ？」

鈴音は顔を上げる。

咎人<sup>とがひと</sup>。

先ほどから気になっていた、言葉だった。

「・・・まだです・・・」

「・・・じゃあ、こちらから説明する。」

そして、夜神は話し始めた。



「普通、僕たち『心術士』（オーラ）は、誰もが『聖人』（レム）になるんだ。心が清く、光に満ちていれば、自然と誰もが光となる。」

でも、と夜神が言う。

「イレギュラーな存在もある・・・ところで鈴音ちゃん、七大罪って、知ってる？」

「・・・人間に課された、7つの感情のことですか？・・・確か・・・強欲、色欲、暴食、嫉妬、怠惰、憤怒、傲慢、でしたよね・・・」

そう、と相づちを打つ夜神。

「その七大罪のうち、どれかでも強い思いを持ってしまったとする・・・すると、元々『心術士』（オーラ）は心を具現化させる者たちだから、光とは正反対の心を持つと、闇になってしまう・・・」

「・・・闇・・・」

「そして、その闇の道を歩む者の1つに入るのが、『咎人』（とが  
びと）・・・別名、シャドウとか、いろいろ呼ばれてるけどね・・・  
」

・・・闇を、歩む『者』・・・？

「それじゃあ・・・あれは・・・」

「元、『人間』だよ。」

鈴音は驚愕する。

あれが、人間？

信じられない。あの動きはまさに動物そのものではないか。

「『咎人』（とがびと）は、なにも入ろうとして闇に落ちたんじゃ

ない・・・無理矢理心の中の闇を引きづり出されて、それに心を覆われてしまった者・・・被害者なんだよ・・・」

「・・・心を・・・無理矢理・・・？・・・そんなこと・・・できるんですか？」

「できる者がいる。闇の道を歩む、もう一つの者たち・・・それが・・・『咎鬼』（とがおに）だ。」

『咎鬼』（とがおに）。

共夜が助けてくれたとき、発した言葉。

「こいつらは被害者じゃない。真の加害者。自ら心を闇に落とし、闇の力を操る者たちのこと。僕たちが戦ってる奴らのほとんどがこれだ・・・例外はあるけどね。」

「・・・例外・・・？」

そう、と相づちを打つのは、刹那だった。

「例えば、私とかね。」

鈴音は刹那のほうを見る。

鈴音は驚愕した。

・・・この人が・・・『咎鬼』（とがおに）・・・？

だが、驚愕するのはまだ早かった。

「それと・・・共夜もそうよ。」

絶句する鈴音。

・・・共夜が・・・？

わたしを・・・助けてくれた・・・彼が・・・闇・・・？

「だから、例外なんだよ、彼らは。」

そう言って続ける夜神。

「自分の心を闇から光に変えて、闇の力で戦う、共夜や刹那・・・特に共夜は、その鬼神のごとき、特別中の特別の強さから、『心術士』（オーラ）からこう呼ばれている。」

そして、夜神は口を開く。

「……『闇の帝王』（ダークエンペラー）……」

『闇の帝王』（ダークエンペラー）。

黒コートの男たちが言っていた言葉。

「……『闇の帝王』（ダークエンペラー）……」

鈴音は思った。

共夜や、刹那さんが闇なら、いったいどんな気持ちを持って闇に入  
ったのだろう……？

そんなことを考えている途中……

「さばみそ、お待ちどうっ！！」

そういつて、夜神の目の前にさばみそを、食堂の店員が運んできた。

おおっ！！と歓喜の声を上げる夜神。

「来た！！僕の好物なんだ、これ！！」

そして、鼻歌交じりで割り箸を割って、魚に箸を向けた・・・

ドガァアアアアアン！！

どこから轟音が響いた。そして・・・

ヒュン！！

ガシヤアアアアア！！バチュツ！！

・・・夜神のさばみそが、飛んできたなにかにはじき飛ばされて、床にぶちまけられた。



「・・・・・・・・」

無言のまま、そこで固まる夜神。

誰もが飛んできた方向を見る。

そこには・・・・・・・・

「おらぁ――！もうお終いか！？相変わらずだっせえやろっだなぁ、共夜――！」

・・・魅守、そして・・・・・・・・

「ふざかんじゃねえ！！こんなで終わるか！！この1500才のクソジジイ！！」

お互い罵声を浴びせ合い、喧嘩になるのを繰り返す2人。先ほどの食べ物の口論から、殴り合いの域にまで発展してしまったようだ。共夜はすぐに立ち上がり、魅守をぶん殴ろうと足に力を込める。

だが……

周囲から人が、蜘蛛の子を散らすように逃げた。

「「???」」

2人は不思議に思う。

・・・ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

ゾクゾクウ!!

2人に戦慄が走る。

なにかの凄まじい殺気が、2人を固まらせる。

そして2人は、殺気のする方向を見る・・・

そこにいたのは・・・不気味なほどにつこり微笑む夜神。

「・・・エ、エートデスネ、夜神サン、コレハ俺ノセイジャナク  
テ・・・」

2人そで、先ほどあんな喧嘩をしていたのに、息ぴったりだ。

「……共夜君……魅守君……？」

そして、夜神が口元を緩めて言い放つ。

「お仕置きの時間だよ？」

その後、共夜と魅守は全治9ヶ月の大けがを負った。

-----  
-----

「……………」

ここは、とある寝室。

そこに鈴音がいた。

鈴音はそこにあるベッドに横になって、先ほどから眠ろうとしている……

が……

「……………ダメ……………眠れない……………」

そして、体を起こす鈴音。

鈴音は、どうしても眠れない。

眠ってはいけない。体がそう言っている。

もしかしたら『咎人』（とがびと）が襲いかかってくるかもしれない。

保護してもらっているが……絶対安全と、自分ではどうしても断言できない。

(・・・誰か・・・)

鈴音は願う。

(誰でもいいから・・・そばに・・・)

そして・・・

「よお。」

鈴音はビクッ!!とした。

声のした方向を見ると、そこにいたのは・・・

「共夜!?!」

そこにいる１７才くらいの少年（体中包帯でぐるぐる巻き）は、懷から線香を取り出して、火をつける。

「あつ、あんた、なんでここに!？」

「・・・いやあ？どこかの誰かさんが怖くて怖くて眠れない、と言っていた気がしてねえ？」

鈴音は顔を真っ赤にする。

独り言で、口にしてしまっていたのだろうか。

「だ、誰が怖いなんて・・・それに、あんたみたいなボロボロの怪我人に頼ろうとするほど私は・・・」

「あつそ、じゃ、いいんだ？俺もう帰るね。」

「あつ、ちょっと・・・」

ハッ！！口にしてしまった。

口を手で覆う鈴音。

「・・・怖いんだろ？鈴音・・・」

今度はからかうようには言わず、優しく言葉をかけてきた。

「誰だってそうだ。絶対安全とはわからない。いつ自分が死ぬかわからない・・・そんなことを思えば、眠ることなんて誰もできねえ・・・」

そして、共夜は強く言う。

「俺がそばにいる・・・そばにいてくれる人がいれば、いいだろう・・・？」



鈴音はうつむく。

少しの間沈黙し、そして・・・

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

そして、共夜はもう一本の線香に火をつけて、床に置く。

「この香りをかぐと落ち着く・・・寝ても大丈夫だ・・・俺がいる・・・」

そう言うと、鈴音は安堵した表情を浮かべ、ベッドに横になる。

すぐに、すう、すう、と言つ寝息が聞こえてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

共夜は鈴音の顔を見つめる。

・・・そして、『あの人』を思い出していた。

自分に初めて優しくしてくれた『あの人』。

優しい笑みを浮かべてくれた『あの人』・・・

・・・大切だった、『あの人』・・・

・・・共夜はその人の名をつぶやく・・・

「・・・<sup>つづ</sup>響・・・」

そして、そのまま鈴音は、長い夜を終えた。

―行間― 夢（カナシイキオク）（前書き）

k y o u y a

「お待たせしました11話でございます！！楽しんで読んで下さい！！」

共夜

「読んでくれる人は極端に少ないから、待っていてる人もあんまないんじゃないかね？」

k y o u y a

「キサマアアアアアア！！」

―行間― 夢（カナシイキオク）

（????!!???!）

（・・・呼ん・・・でる・・・）

誰が？どうして？

そんなことは分からない。いや、分からなくてもいい。

誰かが私を呼んでいる・・・その声を頼りに、意識をそこに引つ張らせるようにして、その声の主のところへ行く。

ゆっくり歩く私。

歩いて行く道は、ところどころが、プラネタリウムの星のように、点々と光があつた。

周りは、それ以外が黒で塗りつぶされた闇。  
闇の中を、私は声を頼りに歩く。

そして、声のところにだんだんと近づいていく・・・声が大きくなつていく・・・そして・・・

（???く!!??ずく!!）

・・・わたしとは違う名前なのに・・・私のことだと思った・・・

な　ん　で　か　分　か　ら　な　い　．．．

心　が　そ　う　つ　ぶ　や　い　た　よ　う　に　思　っ　た　か　ら　．．．私　は　あ　そ　こ　に　行　く。

．．．見　つ　け　た　．．．１　つ　の、他　の　も　の　よ　り　大　き　な　光。

そ　こ　か　ら　声　が　響　く。

そ　れ　を　そ　つ　と、両　手　で　す　く　う　よ　う　に　拾　う　私。

す　る　と、光　が　強　く　光　り　出　し　た。

そ　の　光　は　虹　の　よ　う　に　輝　く　光　を　放　ち、周　り　の　黒　を　か　き　消　し　て　い　く。

．．．そ　の　光　で、あ　た　り　一　面　が、ス　ク　リ　ー　ン　に　投　射　し　た　よ　う　に、景  
色　を　変　え　て　い　く．．．

変　わ　っ　た　景　色　の　中　に、私　は　降　り　立　っ　た。

こ　こ　は　ど　こ　だ　ろ　う。少　な　く　と　も　私　の　知　っ　て　い　る　と　こ　ろ　で　は　な　い。  
一　言　で　言　う　な　ら、森。

あ　ち　こ　ち　に　樹　木　が　立　ち、深　い　緑　色　の　こ　け　が　生　え　て　い　る。  
人　の　手　な　ど　一　切　加　わ　っ　て　い　な　い、本　当　の　森。

あ　た　り　の　音　は　．．．今　は　冬　だ　と　い　う　の　に　．．．蟬　の　声　で　か　き　消　さ　れ  
て　い　た。

そ　し　て、時　々　聞　こ　え　る　鳥　の　さ　え　ず　り。

不快に思わない。音が自然に溶け込み、私を静かな気持ちにさせる。  
このまま、しばらくこうして、ただただ立っていたい。

・・・そう思っていた。

ドシャア！！ブチャツ！！

全く自然の音とは思えない、なにかを切り裂くような音が響いた。

その音とともに、蝉の声が消える。

鳥たちが飛びたって逃げていく。

音の響いた場所へと私は駆ける。

・・・景色が、色を変えた。

深い緑で彩られた森が、突然、昼から夜になったかのように青黒く  
なった。

心がズキズキと痛んだ気がした。

引き裂かれそうな心・・・その痛みをこらえて・・・涙を流しながら  
・・・なぜ涙を流すのか分からないが・・・私は走った。

そして・・・

「し．．．ずく．．．？」

声が聞こえた。少し高い声。

その声は、私の知っている声だった。

だが、違う。

声の震えから感じ取ることのできる、深い悲しみ。

聞いたことのないアイツの声だった。

その声が聞こえたところを見た。

そこには、紺色の髪をした少年．．．そして、その少年に抱きかかえられた．．．黒い髪をして、白く輝く肌．．．そこには赤黒いなかにかが点々とその人に付いている．．．女の人がいた。

その女の人、巫女装束のような服装をしていた．．．そして、その女の人から．．．線香の香り．．．

「雫アアアアアアアアアア！」



パキン

景色が、と音を立てて崩れていく。

森の景色は、ガラスが壊れるように消えていき、そしてそこにいた紺色の髪の少年も・・・巫女装束の女の人も・・・その景色とともに消えていった・・・

そして、また、プラネタリウムのような景色に戻る。

そのとき、私は涙を流していた。

（なんで・・・）

分からない・・・涙の意味が・・・  
だが、悲しい・・・その感情が、私の目の奥を熱くさせ、私の胸をズキズキと痛めた・・・  
なぜそんなに悲しいのか・・・考えている内に、私はまぶたが重くなっていき・・・

私の意識は途切れた。

―行間― 夢（カナシイキオク）（後書き）

すいません、今回めちゃ少ないですね。

今やってる原稿の代わりをと思って、これ載せました。  
がんばって明日くらいにはのせます。スイマセン。

## 最悪の一日の始まり（前書き）

お待たせしました！！闇の帝王ダークエンペラーの最新話です！！

文が異常に短いけどそんなの気にすんな！！

## 最悪の一日の始まり

（・・・ああ、わかった。これってあれよね？悪い夢ってやつね？）

そして鈴音は自分に言い聞かせる

（早く起きないと学校に遅れちゃうぞお　だから早く目を覚まして  
えええええ！）

だが、全く夢みたいな感じではない・・・目覚める気配、0。

（・・・なんで・・・）

改めて、前を見る鈴音。

鈴音がいるのは、鈴音の通う学校。

彼女の教室は、ざわついている。

それもそうだった・・・転校生が来たのだから。

そして・・・その生徒とは・・・

（なんであいつらがここにいんのぉおおおお！？）

心の中でツツコむ鈴音。

・・・教卓の前に、あるやつらがいる。

3人。

1人は、金髪に近い茶髪の髪の男。

1人は、これまた金髪に近い茶髪をした、ナイスバディの女の人。

そして・・・もう1人は・・・

紺色の髪をした、あいつ。

そもそも、なんでこんなことになったのやら・・・鈴音は1人、密かに今日の朝のエピソードを思い出す。

「・・・あれ・・・？」

鈴音は起き上がった。

でも、昨日寝た、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）の寝室ではない。

いつもの寮。

「????あれ、私って・・・」

そうして、考えようとしたそばから・・・

ガンガンガン!!

玄関をたたく音。

その音に、鈴音は警戒する。

『咎人』（とがびと）が襲いにきたのかもしれない・・・  
そんな考えが、鈴音の脳裏によぎる。

そして、ゆつくりと玄関ののぞき口から、外を確認する。  
そこには・・・

「すうーずうーねーっ！っ！」

彼女の親友。

藤井 萌がそこにいた。

ホッ、と胸を撫で下ろす鈴音。

そして、ドアの鍵を開けて、玄関を開ける。

「萌、どうしたの？」

「どうしたのじゃないよお。一緒に学校行こ？時間やばいよっ。」

そして、鈴音は時計を確認する。

・・・時計は、短針が8、長針が3を指していた。

・・・8：15。

「キャアアアアアア！？もうこんな時間！？」

登校しなければいけない時間は、8：30。

鈴音の寮から学校まで、歩いて約30分かかる。しかも鈴音はまだ起きたばかりで朝食すらとっていない。

どう考えても走っていかなければ間に合わない。

すぐにパンを口に放り込んで、萌を置いていくつもりかというくらいスピードを出して走行する鈴音。

「待つてつてば！！鈴音ええ！！置いていくなんてそれでも親友かあアアア！！」

後ろで何か怒鳴ってるが、気にしない。

「少しは気にしろオオおおおお！！」

ゼーハーゼーハー、と息を切らして教室に入る二人。  
なんとか間に合ったようで、安堵のため息＋をはく二人。

「な・・・なんとか・・・間に・・・ハア・・・ハア・・・合った・・・」

「・・・鈴音・・・絶交・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

ごめんって、と言う鈴音に対して、許シテタマルカ、と返事をする藤井。

そしてそのまま、1・3と書かれた、プレートがかけである教室に入る。（ここが鈴音と萌のホームルーム）



そこでは、ガヤガヤと騒ぐクラスメイト達がいた。

「マジで！？転校生くるの！？」

「今の時期に、なんで？」

「親の仕事先で外国に行ってたんだって。」

「で、どんな人なの？」

「結構美形だって、髪が紺色なんだって！！」

紺色お！？と生徒達はわいた。

紺色の髪など、普通ないからだ。

・・・その言葉に、鈴音も、生徒達とは違う意味で反応する。

（・・・紺色・・・？）

なんだか妙に身近なワードのような気がしたが・・・あれ？

・・・あれ？

「どうしたの？鈴音。」

萌の言葉は届いていない。そして何か考え事をするような顔になったかと思うと・・・

ビククウ！！と体を震わせた。

それにつれられて萌も体をビクンと震わせる。

「なななななに！？どうしたの、鈴音！？」

「ありえないありえないありえないありえない絶対ないからそんなの絶対ないから絶対絶対だから安心してオツケー！！」

「誰か通訳お願い！？鈴音が壊れた！！」

・・・今度は鈴音の方に視線が集中。そんなことも全く気にせず独り言を何度もつぶやく鈴音。

（大丈夫よ鈴音、こんなときは深呼吸よ深呼吸、さあ息を深く吸って吐いてすっ）

ガララララ。

扉が開く。

ウグッ！！と息を詰まらせて、危うく窒息しかけた鈴音。  
その窒息しかけた鈴音から、またビクンと反応する萌。

そこに担任の先生が現れる。

青崎 あおさき 照真 てんま という名前の、名前からするとちよつと意外な女の先生。

フウ、と安堵の吐息を吐く鈴音。  
その様子を見て、『ホントにどうしたの、鈴音！？』なんて言っているが、全く耳に入っていない鈴音。

(・・・はあ・・・びっくりし)

ヒョイ、と教室に入ってきた人がいた。  
それを見て、凍り付いた鈴音。『鈴音！？帰ってこい鈴音エエエエえええ！？』なんて叫ぶ親友を全くスルー。

・・・鈴音にめちゃくちや見覚えのある紺色の髪をした線香中毒者が普通に入ってきましたね、ハイ。  
上半身をだるそうに傾け、結構長めのズボン・・・鈴音の学校の制

服・・・を着て、これまただるそうに歩き、教卓に上る男。  
だが、けっこう顔がイケてるため、女子から『おおおおっ!!』  
と歓声がする。(約1名を除く)

先ほどまで鈴音の変な様子におろおろしていた萌も、「けっこうい  
いかも!!」なんて言ってる。

未だに固まったままで動かない鈴音。

(だ、大丈夫よ鈴音。あんな顔はよくあるものよ、よく似た他人よ  
く似た・・・)

そんな中、黒板の方にある名前がすらすらと、照真先生によって書  
かれていく。

・・・はつきりと、聞き覚えも見覚えもある漢字が書かれた。

霜月 共夜

(だからよく似た他人そしてよくある名字だから大丈夫大丈夫そん  
なことないそんなことないないないないマジでないからア  
アアあああ!!)

心の中で悲鳴を上げる鈴音。『鈴うううずうううネエエエエええ  
!?!』

なんか変な声が聞こえるが全くのスル―。

そんな中、照真先生がそこにいる転校生に対して話しかける。

「じゃあ、自己紹介してもらいます。名前は？」

そして、それに返事をする転校生。

「・・・霜月 共夜。親の事情でオーストラリアの方に行っていました。よろしくお願いします。」

精神的にすんごく追いつめられた鈴音。だが・・・こんなもので彼女の不幸は終わらなかった。

「あれ・・・？霜月って・・・？」

その瞬間、鈴音はすんごくいやな予感がした。

「・・・あっ！！」

急いで萌を静止しようとする鈴音。だがもう遅い。

「鈴音の恋人じゃん!!」

[illegible]

教室が、沈黙に支配された。  
そこにたたずむ生徒達。

その中で、共夜だけが動き、鈴音にゆっくり近づき、そして・・・

「よっ、鈴音。久しぶりおうばあアアアアア!？」

もう混乱しまくりの鈴音は、とりあえず空気読めない目の前の男を正拳突きで黙らせることにした。

最悪すぎるのにもほどがある(前書き)

ダメだ。前書きもあとがきも書く暇がねえ・・・!!

## 最悪すぎるのにもほどがある

「　　っの萌のバカアアあああ！！」

「あっだああアアアアアあっっ！？」

鈴音は自分の親友に対して、頭を平手打ち。

ペチーン、とか生優しい音ではなく、もはやバァン！！という手加減一切なしの炸裂音が響いた。

「変な噂みんなの前で広げるな！！なんでこいつとこ、こ、こ、恋人なんかに！！」

「だって鈴音、この前そう言ってたじゃん！！」

「言っていないわア！！」

鈴音はゼエ、ゼエと息を切らして大声で怒鳴る。

萌はいつもこんな感じだ。

こんな風にいつもいつも私に対する変な噂を勘違いで流す。

そのせいで今まで何度泣かされたことか。（その度に何度もこんな風にやってあいつを泣かせたことも数知れず。）

流されたデマの数や内容は数知れず。泣かせた回数も泣かされた回数も数知れず。恐るべし。



そんな感じで、そこで顔面に正拳突きを喰らった人を無視して口喧嘩を始める2名。

「いきなし顔面正拳突きはないだろこの暴力女ゴギユ」

もうつつとおしいからもう一発ぶちかますことにした。

おうアあああああ！と悲鳴を上げる共夜。

そんな仲を見せてるというのに、外野はまだ萌の噂でざわざわしている。

「水鏡の攻撃喰らってまだ起き上がれるとは・・・恐るべし。この根性に負けてつき合ったんじゃねえか？」

「ええー？でもそれだと共夜くんって・・・？」

「いや、それはないっしょ？きつと勝負して鈴音が負けたんでしょ？」

「というより、けっこうイケてると思ったのに、鈴音に取られてたのが残念・・・」

「でもあれだと、私たちにもチャンスあるんじゃない？」

・・・なんだか、私が武人見たく見られてると、なんか共夜についていろいろ勝手にキャラ付けされてる気がする。  
これもあのハイテンション少女のせいだこんちくしょう。

・・・とかなんとか言われて、共夜が激痛に悶えている様子なんか誰も気にしないようです。

「くオラア鈴音エ！！再会だつてのにあいさつがこれか！？以前よりさらに悪化してんぞボケエー！！」

復活の呪文でも誰かに入れてもらったか、すぐにムクリと起き上がった共夜。

右頬を痛そうにさすつて、ちょっと涙目になっている。

このとき共夜が密かにこんなことを思っていたのは鈴音には秘密である。

（なんでこいつに男子が寄ってないのかわかった。いったいこうして何人の男子の夢をぶち壊してきたんだろう、こいつ。）

その時、『以前より』という言葉に反応して、萌が声を上げた。

「ねえねえ共夜君！！いつ鈴音に会ったの！？いつからの知り合い！？そして馴れ初めはなに！？」

ドグン！！と激しく心臓が波打つのを鈴音は感じた。  
マ・ズ・イ！！なんかマズイ！！

鈴音は内心密かに悲鳴を上げる。

こんなときにまたでしゃばりやがってこのロリ顔オオオオオオ  
！！

人に言えるわけがない。家に忍び込んで食べ物を食いあさってたのが初めての出会いなんて、そんなの嫌。

直接私に関わることでなくてもなんか嫌だ。マジで嫌だ。

そんなフルパニック状態の鈴音に反して、ああ、それな。と共夜は普通に答えようとしている。

・・・まあ、こいつに直接かかってくるからだからなんかひねり入れてなんとかすると密かに安心する鈴音。

だがそんな期待を共夜は無慈悲の一撃で粉碎する。

「いや、実はここに来て、いろいろ町のことを把握しようと思つて探索してたらいきなし腹へって『あんたつてやつはもうちょい自重しろオオオオオオ！！』いきなしなんだよ鈴音、別に恥ずかしがることでもないだろが。」

「いや、でも言つてほしくない！！」

そうして口喧嘩（周りからそう見られてしまつてる）をしているうちに、周りにクラスメイトが集まってきた。

鈴音の親友のような最悪野郎が主である。

「ホホウ！そんなに恥ずかしがるとはなにかあると見える！！さあ、白状するのよ鈴音、いつとくけど扉の鍵は全部閉めてあるから出ようと思っても」

その続きの言葉は未来永劫言われることはない。

なぜって？それは、

バギーン！！

派手な音を立てて扉を乱暴に開けて（というよりぶっ壊して）外に出た鈴音。『ヒィイヤアアああ！？火事場の馬鹿力ああアアアア！？』と叫ぶ共夜。

そしてそのまま疾走してクラスと言う名の魔獣達から逃走した鈴音。

その様子を見て、クラスメイトはただポカーンとしていた。

『はっ！！エスケープ！？』と萌と照真先生が叫ぶのは5分経ってからである。

「ハア、ハア、ハア・・・」

「なんであんなに焦って出るんだよ。そしてなんだあの馬鹿力は。お前ホントに人間か？」

「うつ・・・さいわね・・・ハア・・・この・・・バカ・・・」

バカはお前です、とありがたいお言葉を共夜からもらった。あとで裏拳ぶちかまされる運命が決定したことを知らない共夜に、鈴音は問う。

「というより、なんであなたはここにいの・・・」

「え？だから恩人にお礼に来ちゃいけないの？」

「恩人って・・・あんだ、私の『だって自分の飯になるはずだったもの食わせてくれたんだもん、お礼参りぐらいしたくなるって。』あんだが勝手に食いあさったんでしょうが！！」

「目の前にめっちゃうまそうな飯があるもん、そんなの我慢できつつてやつなのよ！！」

「少しは自重しろボケコラ」

もういったいなんなんだこのバカは。

話してるだけでこんなに体力使うとか、どんな体力の無駄使いだ。しかもそれだけ体力消費しといて目の前の紺髪（めんどいからこれからこう呼んでやることにした）の線香中毒者はムカツクくらい涼しい顔してやがる。

「ああ、もう、なんで私の周りでやっかいなことばかり起こりまくるのよ!？」

「なんでそんな冷たい目で俺を見んだコラ!! まさかそんなかに俺も入ってんのか!？入ってんだなこのやろう!!」

「まさかも何も入りまくりよブラックリスト入りよ!!入ってる自覚すらないとか最悪よこのバカ!!」

今は授業中です。静かになさい2人とも。

ギヤーギヤーと周りのことすら考えずに騒ぐ2人のもとに・・・

「ハイハイ、そこのおふたりさん？」

鈴音はギョツとした。

この冷たくて底の知れない声は・・・

「仲がお熱いのはよろしいですけど、もう見つけちゃいましたよエスケープ野郎ども。」

ドツと汗が噴き出すのを、鈴音は感じる。

こっちは鳥肌たって戦慄が走りまくってるのに目の前の紺髪野郎はクエスチョンマーク頭に浮かべてやがる。

そして鈴音はギギギ、と音を立てて（いると思われるような動作をして）後ろを見る。

すると、そこには眼鏡をかけた、自分のクラスの担任が。

生徒指導で青鬼と陰で呼ばれてしまってる照間先生がいます。しかもにっこり笑顔で。

「もう逃がしませんよ水鏡さん。霜月君も、転校初日でエスケープですか、そうですね、まず最初にきっちりこここの校則を身にしみさせる必要がありますね。そうですね。」

はあ、いつもの照間先生だ、日常だと喜びにかすかに浸っては絶望に打ちひしがれるロング髪の少女。

「ちょ、許してくださいって、俺別にエスケープしたかったわけじゃないませんって!!」

あたふたする共夜を見ても、照間先生はにっこりと笑うばかりである。

「れ・ん・た・い・せ・き・に・ん・です。」

うええええ、と嘆息する共夜。

「ちつくしょー、鈴音、おまえのせいだぞこの野郎!!」

「うつさい!!少しはその減らず口直せ!!」

「ああもう私の平穩の学校生活返せこの変態!!」

「誰が変態じゃこのボケエ!!どこらへんが変態か3秒以内に述べてみるゴルア鈴音!!」

「性格。」

「迅速かつ心を抉る的確なお言葉見事ですこのドS!!」

またギヤーギヤー騒ぎだした2人。

その2人を見て、またさらに『悪魔の微笑み』を深める照間と言つ名のウリエル様。

ボコボコにされるのはまた後のお話である。



ある場所があつた。

何もない黒の空間。共夜と鈴音が渡つたあの道と違つて、またさらに寒さと暗さを深くした空間。

誰もこんな空間を好む者はいない。

誰もこの冷たさを心地よいと思う者などいない。

・・・少なくとも、ある人物以外は。

そこに、夜神はいた。

誰も愛さないこの空間を、彼は愛していた。

これこそが、彼の心を　人の心を表していると理解していたから。

人の心にはいろんな色がある。白・青・赤・緑・・・それらはすべてその者の心を表す。

だが夜神は知っている。

黒こそが人間の根底にある心。

闇こそが人間の深い深い場所に埋め込まれた気持ち。

理解する者しか好まぬこの絶対的な黒・・・真の人間を彼は愛する。

「・・・やっぱここはいいなあ・・・」

だが、理解する者は彼しかいない。

彼しか、本当の人間を理解できないから。

「・・・人間ってのは、黒い生き物だ。」

誰にともわからず、夜神は語り始める。  
闇のなか、本当の人間を語る。

「人間に白はもともと無かった。生まれたときはただの動物。そこにあるのはただ生きたいと願う黒のみ。そして黒は色彩を変えていろんな色に変わっていった。黒こそが原点。すべての始まり。生きたいと願う『想い』の中から人はいろんな『想い』に気づき、心のアートを作り出す。」

そしてその男は続ける。

・・・それはまるで、自分の心に語りかけているようにも思えた・・・

「だから僕は黒が好きなんだよ・・・わかるかい？・・・刹那。」

そして、闇から1人の人間が現れる。

そこにいるのは金に近い茶髪をした女性。その表情は苦々しく、足取りもどこか重々しく、震えている。

額から冷や汗が一筋垂れ、それを右手で拭う。

そして一歩ずつ歩み寄る刹那。

彼女は彼と違ってこの空間をひどく嫌う。

・・・彼女はこの冷たく、孤独を思わせる黒が嫌いだから・・・

「・・・持ってきてくれた？例の物は。」

「・・・はい。でも、これなんなんですか？」

黙ったまま、刹那はある物を取り出す。  
紙だった。何の変哲もない、ただの紙。

「別に知らなくていいことだよ。こっちに渡してくれ。早く。」

夜神は右手をスツと出し、その手に刹那は震える手で、その紙を乗せる。

そしてそれを夜神は開いた・・・

そのときだった。

「アッハハハハハハッ」

その手紙を見て、笑い出した夜神。  
その様子を見て刹那はポカンとする。

「やられたねえ、刹那。」

そして夜神は紙を刹那に渡す。  
そして刹那はそこに記述されていたことを見てギョツとした。

## 『前略』

やつほう夜神クン元気い？この紙を見たテメエの顔が目には浮かぶなあ、総隊長。

残念だけど例の物はこっちで処分しとくわ。刹那と他のやつらを用いての無駄な努力、ご苦労様。

あ、あと刹那。バ力でありがとう。そっちの企みモロバレしたのアンタのおかげです。感謝感謝。それじゃグッバイ。』

あーあ、と呆れたように声を出す夜神。

「彼じゃしょうがないね。伊達に『闇の帝王』ダークエンペラーの名を受けてるわけではないね。」

「・・・共夜。」

「こっちの企みモロバレか。ま、いいや。こつでもないと面白くないし。」

「・・・総隊長。」

「うん、それに警告だつてあるから簡単には動けないや。この任務はしばらくいいよ、鈴音。」

警告？と刹那は問う。

そして夜神は笑顔で右手の人差し指を下に向ける。

「その文の下。」

刹那は下を見る。

そして、時間が止まったと思った。

『P・S・』

そして更に下には、

『もし今度こんなマネして見やがれ、』

絶望が胸の中に広がる、

『そんなときは・・・』

共夜の意思。

『ケロベロス地獄ノ番犬全部潰してやる』

一切冗談抜き、殺意を込めた共夜の言葉に、刹那は言葉を失う。  
手が先ほどより震え、冷や汗で手紙が少しにじむ。

そんな刹那とは対称的に、夜神は全く表情を変えず、ニコニコしている。

それが刹那の???夜神が好む心の黒???生存本能を一層激しくする????

「ちょうどいいや。」

次の言葉で刹那は確信する。

「退屈だったんだ。嬉しいよ、共夜」

・・・夜神は狂っている。

そんなことも知らず、鈴音は眠っていた。

これは、鈴音の長い夜の終わりにあった、とある2人の、意志の戦いである。

『かなり重大なお知らせ』

今日ここに重大発表（でもないこと？）を告白します。

・・・実はこの作品を、コンクール作品として発表したいと思っています。

原稿は大改造するし、万が一、億が一にこの作品が、もし入賞出来たら、これも消します。

落選したら（とゆうーかほぼ絶対落選する）、その大改造を施した、リメイク小説をここに出します。

更新はもしかしたら半年くらいないと思います。他の作品は頑張つてやりますが。

とりあえずはそれだけです。

この小説を読んでくださってる皆様に迷惑をおかけします。もうしわけありません。

## お詫び

この小説を愛読していただいた皆様（いないかもしれんねえ・・・orz）、まことに申し訳ありませんが、この小説はここまでです。元々この作品は試験作品として提出したものでした。この試験作品をキチンとした形で作成している作品がありますので、そちらを検索し、読んでいただければ幸いです。

尚、本作品では、試験作品と若干内容が異なりますので、ご了承ください。

では、闇ノ帝王 Dark Emperor にてまたお会いしましょうノシ

・・・来てくれる人が10人と満たない方に一票（T―T）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8974m/>

---

闇の帝王（ダークエンペラー）

2011年3月15日23時50分発行